

社会を知ることの大切さ

愛知県・愛知県立知多翔洋高等学校 2年 佐々木 梨絵

「梨絵は美容師になるといいかもね。」

毎朝母に髪を結ってもらうのが楽しみで、母をまねて妹の髪をいじるのが大好きだった私に、ある日母がこう言った。それ以来、私の夢は美容師になることだ。

小学生というのは、先生やスポーツ選手など、身近な職業や、華やかな職業に憧れるものである。小学生の私達にとって、美容師という職業は決して身近なものではなかったけれど、おしゃれでかっこいいイメージがあった。私は自分の夢が美容師であることが自慢だった。まわりの友達がケーキ屋さんやサッカー選手など、定番な職業に憧れる中で私だけ美容師というのは、身近じゃない分大人に思えて、優越感に浸れた。

中学生になると、ケーキ屋さんやサッカー選手だった友達の夢は、介護士や理学療法士になっていた。私は世の中にそんな職業が存在することさえも知らなかった。美容師になることしか考えていなかった私は、他の職業に目を向けたことがなく、世の中にどんな職業があるのかよく知らなかったのだ。私は名前も知らなかったような職業を、みんなは将来の夢として考えている——。華やかではないけれど、超高齢社会といわれる今の日本に確実に必要とされている職

業である。私がただ漠然と美容師になりたいと思っている間に、みんなは社会に貢献する方法を考えていたのかと思うと、一人取り残されたような気がした。福祉や医療など、人の命に関わる職業は「重い」職業だと思っていた私は、そんな職業を目指すみんながすごく大人に思えた。そして美容師は社会問題と無関係な職業に思えて、これでは社会に貢献できないと、夢に自信を持てなくなっていた。

ある美容院に行ったとき、私の考えは変わった。その美容院は、入り口の段差に手すりが付いていた。美容院に手すりというのは、何か違和感があった。私がそれまで行ったことのある美容院は、おしゃれで若者向けで、手すりなんかなかったからだ。しかし店内にいるお客さんは子どもからお年寄りまで様々で、若者ばかりではない。私は手すりがあることに違和感を感じたけれど、本当は手すりがないことの方がおかしいのではないのだろうか。見た目重視のつくりは確かにお年寄りには不便そうだった。高齢化の進行とともに、美容院など、主に若者をターゲットにしているサービスでも、高齢者が利用することを考えて進化していくべきだ。「高齢化」とともに頻繁に

耳にするようになった「バリアフリー。」福祉や医療関係の職業に就くことだけが高齢社会に貢献する方法だと思っていたけれど、バリアフリーの美容院をつくるというのも、高齢社会に貢献する方法かもしれないと考えるようになった。

高校受験の時期になると、バリアフリーの美容院をつくりたいという考えは、かなり具体的になっていた。移動が楽にできるように、店内はあまり広くせず、段差を一切なくし、もちろん手すりも付ける。高齢者向けの雑誌と一緒に、目の不自由な人のために虫眼鏡を用意したり、耳の不自由な人のために大きな声ではっきり話したりというような、細かい気配りも必要だ。この夢をどうやったら実現できるのか。ちょうど高校受験の時期だったこともあり、真剣に考えた。社会に貢献するためには、変化していく社会の状況を常に知っている必要があると考え、経済やビジネスについて勉強できる学校へ進むことにした。

高校2年生になった私は、経済やビジネスの勉強をしながら、夢の実現と働くことの意味について考えている。以前の私は福祉や医療関係の職業は「重い」職業だとか、美容師は社会問題と無関係な職業だなどといった、偏った意見を持っていた。確かに人の命に関わる職業の責任は重いですが、職の重みというのはどの職業も変わりはない。

美容師が社会問題と無関係だと感じたのは、美容師が社会の状況や年齢、性別に関わらず、どんな人からも常に必要とされているからかもしれない。しかしそういう職業こそ社会の変化とともに変わっていく必要があるのだ。「カリスマ美容師」が流行した後、美容院はますます若者の場所となり、「ヘアサロン」と呼ばれるようになった。人気のあるヘアサロンのトップスタイリスト達が雑誌に取り上げられるようになり、今まで以上におしゃれであることを求められている。これも「流行」という一つの社会に合わせた変化かもしれないが、私には日本が抱える問題から目をそらしているように思えてならない。経済やビジネスについて知ることで、自分の将来についてさらに深く、現実的に考えられるようになった。

高校卒業後は美容の専門学校に進み、いよいよ美容師になるための勉強を始める。しかし経済やビジネスについての勉強はずっと続けていきたい。今私は17歳。精神的にも社会的にも、もう子どもではない。高齢化も少子化も他人事ではないし、これから日本を支えていく者として、社会と向き合っていかなければならない。経済やビジネスを通して社会を知り、夢の実現と働くことの意味の答えを見つけていかなければならないのだ。